

■論文題目	ゲストハウスを起点とする地域活性化		
■氏名(学籍番号)	片岸侑希(0412022303)		
■指導教員	倉原宗孝	■所属コース	地域社会・環境
■キーワード	ゲストハウス	地域活性化	繋がり

1. 背景と目的

全国的に人口減少が進行し(総務省 2021)各地で地域活性化として様々な政策が行われているが効果を感じられるのは政令指定都市の近くの自治体や、例として草津温泉などの知名度の高い観光地を有している所に限られており、地方の地域活性化において次の一手が求められている。地域活性化に必要な要素は地域内外の交流であり、特に必要なのは外部との繋がりから関係人口を増やすことだ。西村(2009)は「まちづくりはわたしたち共通の家という意識を持った地域社会の構成員の間の運動」とし、地域の発展に必要な外部社会は地方から隔絶された存在であることを指摘しており、人の繋がりが必要であることを述べている。地域内で人が繋がる場所は多くあるが、内外部との繋がりを持てる場所としてゲストハウスが考えられる。ゲストハウスは「ドミトリー及び共有スペースを設け、宿泊者同士が繋がりを持つことを前提とした宿泊施設」であり、「地域社会と外部社会のパイプ役」から「地元の魅力の再発見」など多くの機能を持っている。石川・山村(2014)は「ホテルや旅館では得難い、宿泊者同士の交流が創出されるような場所の創出が目指されている」と述べ、長田(2015)は「ゲストハウスで行われる地域資源の活用と地域との交流から、地域活性化の手掛かりとなる可能性がある」としている。しかし、実際に地元住民や宿泊者がゲストハウスから何を得ているのか、ゲストハウスが地域自体にどのような影響を与えているのか明らかではない。

以上から本研究ではゲストハウスが地域活性化にもたらす可能性を、「地域内での役割」「外国人材」「拠点内外の交流」「情報交換」の観点から分析する。ゲストハウスは全国的に北海道、関西、沖縄が母数を増やし続けている。調査をするにあたり、人口の特に少ない地域での地域活性化の可能性を探るため、東北を軸に調査を進める。比較対象として、東北と気候が似ている点、札幌など都市部がある点、一方で地域活性化が進展していない地域がある点が類似している北海道を比較対象とし東北のゲストハウス事業がどのような位置づけにあるのかを示す。調査方法は、北海道と東北のゲストハウスをインターネット調査よりリスト化し四つの分類に分け、電話調査によって分類を裏付けた。現在全国のゲストハウスは数を増やす一方で全国では

分類	施設名	市町村	情報	施設の地域における運営目的
A	SMALL TOWN HOSTEL Hakodate	函館市	二階建て・開業2017・ドミトリー・個室・キッチン・料金3,700円・リノベーション済み・110平米	「地域の情報を惜しみなく伝え、旅行者地域を見る際の拠点となるような場所を目指しています」との回答を得られた。地域資源を活用することを前提としたゲストハウスである。
B	GUEST HOUSE 66	角田市	二階建て・開業2017・ドミトリー・個室・無料朝食・料金2,900円・無料バイク駐車場・200平米	「私自身バイクがとても好きなので、バイク旅の休憩所として施設を運営し、共通の趣味で繋がりを持てる場所にしたいです」との回答結果を得られた。バイクの拠点であり、利用者の距離が離れやすい環境が作られている。
C	宿や萩	仙台市	二階建て・開業2015・ドミトリー・個室・料金2,500円・リノベーション済み・200平米・自転車ラック有	「仙台駅周辺で一番安い宿をコンセプトに運営しています。外国人の利用者も多く、異文化交流として利用される人も多かったです」との回答結果を得られた。安価な宿は人が集まりやすい傾向にあることが分かる。
D	夏油高原スキー場	北上市	二階建て(二階部分がゲストハウス)・宿泊事業開始2,020年・ドミトリーのみ・料金6,700円・スキー場直結	「近年では外国人利用者が増え、スキー場と一体となって利用者、スタッフ関係なく盛り上がりてもらいたい」との回答結果を得られた。スキー場という人が多く集まる場所では新しい繋がりも創出しやすい。

図1 分類ごとの電話調査の結果

出典:筆者によるインターネット調査のリストを基に作成

2000軒以上存在し、全てを正確にリスト化することは困難であると判断した。また、北海道はリゾート地も多く、設けた分類全てに当てはまるゲストハウスを有していたため東北との比較で分析を行えると考えた。現地調査では分類の中から調査に適していると判断したところを選択し、調査を実施、ゲストハウスの実態を明らかにした。

2. 調査及びタイプ分け

インターネット調査により、北海道と東北で103軒のゲストハウスがあった。ゲストハウスのタイプはA「まちなか寄与タイプ(移住・長期滞在を視野に観光拠点となり得る)」、B「自己発展タイプ(オー

ナーの拘りや趣味を利用者が求める)」、C「都市依存タイプ(都市部に多く、安価に宿を提供する事を目的とする)」、D「リゾート依存タイプ(リゾート地の集客に依存している)」に分類される。分類の裏付けとして、電話調査を行った結果、分類したゲストハウスが各タイプに適合していることが分かった。図1は各分類の代表となるゲストハウスを選択し調査した内容である。タイプAのゲストハウスは自治体の規模に関わらず地域の資源を活用し、まちに寄与するタイプである事が分かった。タイプBに該当した角田市のゲストハウスは山間部に位置しており、オーナーのバイクの趣味が前面に押し出されていた。タイプCに該当した仙台市は都会の中で安価な宿を提供する事を目的とし、タイプDに該当した北上市の店舗では設定したタイプDの定義通りリゾート地という場所に依存するものだった。現地調査では各分類に該当した東北地方のゲストハウスを訪問し、地域内で実際にどのような機能を果たしているのか明らかにした。調査対象はタイプA「meinn(花巻市)」、タイプB「温泉ゲストハウスやすもり(八幡平市)」、タイプC「宿や萩(仙台市)」、タイプD「夏油高原スキー場(北上市)」とする。調査結果から分類したタイプの定義に選択したゲストハウスは当てはまっており、ゲストハウスのコンセプトは様々だがすべてのゲストハウスで地域内外部との人の繋がりが構築されていることが確認できた(調査内容詳細は本論に記載)。

3. 調査結果との比較

タイプ分けしたゲストハウス全てに「地域内での役割」「外国人材」「拠点内外の交流」「情報交換」の機能が当てはまった。しかし、タイプごとでそれぞれの役割に特化していることが分かった。タイプA「まちなか寄与タイプ」では「地域内での役割」、タイプB「自己発展タイプ」では「情報交換」、タイプC「都市依存タイプ」では「外国人材」、タイプD「リゾート依存タイプ」では「拠点内外の交流」が得意な分野として挙げられる。特にタイプAでは地域活性化において必要な地元住民の働きが見られた。わざわざ旅行者に会いにゲストハウスの居酒屋を利用する人もいた。旅行者にとって、地域と関わりを持ったとを感じる一つの瞬間だと考えられる。また、東北では北海道全体の約三分の一しかゲストハウスが無く、地域の衰退など課題が多く残る東北地方において地域活性化のきっかけが少ないのではないかと考えられる。

4. 結論・考察

以上の調査から、東北はゲストハウス事業に大幅な遅れを取っているが人を繋ぐ役割を果たしているゲストハウスも存在する。特に地方では宿泊者との一回きりかもしれない出会いを地域側から求めることが地域に人がくる可能性になり、ゲストハウスとして地域活性化に繋がりという部分で寄与できることが示唆された。特に、札幌市、仙台市以外の地方でタイプAのゲストハウスが多く存在し、利用者のからは地域の魅力を存分に味わうことが出来たといった声が多く確認された。インターネットでの情報提供など地域の魅力発信のようなことは、ほとんどの自治体が行っているが規模の小さい地方ほど実際に現地に足を運んでいる旅行者に目を向けて、そこでしかできない体験を用意することが今後の関係性の強化や新しい人材呼び込みにつながるのではないかと。一方で、地域内でゲストハウスが地域活性化に寄与していることを認知させ、地元住民の地域活性化に人の繋がりが重要であることを理解させる工夫が課題となるだろう。

〈参考文献〉

- ・総務省 (2021)「人口推計・結果概要」 p1-3
- ・西村幸夫 「観光まちづくりとは何か まち自慢からはじまる地域マネジメント」 p57-59
- ・石川美澄・山村高淑 (2014)「国内における宿泊施設型ゲストハウスの経営と利用の実態に関する研究」『都市計画論文集』vol.49 No.2 pp140-145、日本都市計画学会
- ・長田浩幸・横山俊祐・徳尾野徹 (2015)「宿泊施設型ゲストハウスと地域との連関に関する研究」 p14-17